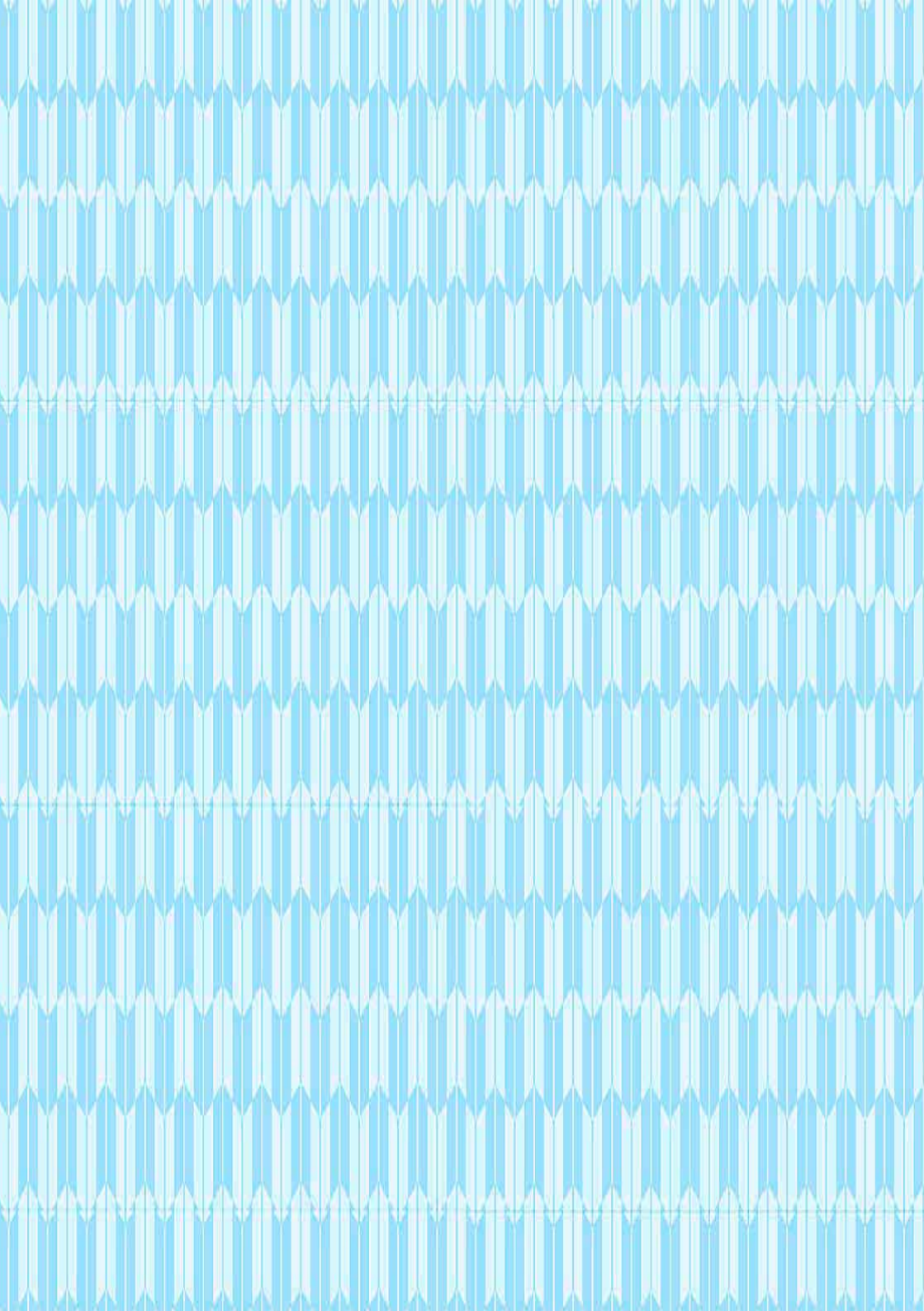


あそ

1

2024





秋の書古陶の急須おはとあに
春一

瀧
春一
筆

あそ

一月集

THE・俳

佐藤
竹僊

嫋嫋として纏綿とつづれさせ

ねこじやらしみな白頭に庭を出ず

木のありて毬栗二つ卓に置く

のこされし玉葱が芽を噴出す



父母も子もおろかにてむかご落つ

提灯の裡に入りて秋夕日

もみぢの日あつめてをれば暑くなる

罐コーヒーのむたび秋を確かめて

菊月のポルシェを抜いて自轉車で

鷺の顔魚の顔とむきあへり



エネルギー湧く 秋川泉

うかうかと梅檀草につかまりぬ
踊り子の袂ひらひらまあ案山子
樽柿の日浅く渋の残りたる
木枯や隣の猫も足早に
卓上に銀杏ご飯湯気上る
エネルギー秘めた球根秋の庭
御会式や引かれし子らは僧の手に
御会式の鉦や太鼓に子が跳ねる
闇よりの湧きいでて舞ふ御命講
御会式の闇をつんざく御題目
落下するレジーナの浮遊月へ

前号正誤



渋柿

七郎衛門吉保

秋の空サイダーのごと嘘はなく
渋柿や固形エチルで渋抜かれ
渋柿の風味を変へて二枚腰
コーヒ―を少し熱めの冬隣
衣裳箱開け閉め開ける冬構
冬句会「空や」の餡の頭に甘味
柚二個をぶつけて揺らす朝湯かな
冬日影芝生の上に武者を見る
賞を受く八女の玉露の新嘗祭
雪女迎へに行くのスタドレス



しぐれ

篠田純子

初しぐれ七五調なる観音経

卒塔婆の梵字の辺り時雨けり

皺の吾の手へちさき手タッチ片時雨

歩きスマホとぶつかっっちゃった神の留守

小灰蝶の卵さぞかし小さからむ

落ちぬたる蝶の片羽掃く晩秋

今朝の冬手櫛に絡む風柔し



目的地

篠田大佳

行く秋や誰かの旅の目的地

晩秋温し陸橋くぐる影法師

ピアノ冴ゆプラットホームへ至る道

親切なる旅人パークス婦人と呼ぶ初冬

初冬のカフェに雨止むを待つ

氷雨となり子の古い様を見届ける

戦災の瘡蓋取れぬ僧しぐれ

歌ふ子の去りし墓場をしぐれかな

小雪や手紙の紙の縮みけり



小春日

須賀敏子

突然の寒さ十一月になる

早々と落ちる夕日や実南天

小春日やワクチン待ちの人静か

花八手妹の家鍵掛けず

長屋門まだある屋敷花八手

句座果てて銀座の街は時雨けり

羽田より見送る友は雪国へ



雑詠

都築繁子

秋祭り園児のかなづ笛太鼓

盛んなり去年求めし黄の小菊

手を出せば水出る蛇口返り花

烏瓜一つ見つけし散歩道

見下ろせる紅葉日毎飽きず見る

丸の内場違ひなれど秋うらら

逝く秋のキッチンカーの列つく



初時雨

長崎桂子

風伝おろしと言ふ美浜町暮秋
露けしや毛糸の羽織重ね着ず
金柑を甘く煮てをり冬用意
風つよし新種コスモス鉢植に
秋雨の鳳来寺山やうるはしき
急坂に残り鮮やか冬紅葉
立冬や雲あつくして午後いかに
報恩講野菜こんにやく煮しめをり
小春日や凡ての窓を開け放す



雑詠

森なほ子

それぞれに背を岩に付け出湯の秋

単線の奈良の踏切冬日和

駅弁の酔の香車窓の冬日差し

銀杏の落ち尽くしたる葉の青し

草枯れて津波知る人海を見る

絨毯にゑくぼ沈めてゆくヒール

来ては発つ小鳥四羽五羽雨雫

錠剤の転がる先の夜寒かな



世相

赤座典子

ラ・フランス軸の直ぐなる佇まひ

肘ついていつものカップホットティー

鳥を飼ふ普通の暮し冬の雷

煮凝や理不尽不条理渦巻きて

冬ぬくし三年振りの映画館

「宮城ふるさとプラザ」に葱の束

拘るのは鍋焼饅頭への玉子

鰯酒や世相にまどひ惑ひたる

七台載す積載車の威容冬日影



十一月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

雲の穴ぼっかり夏の空がある

佐藤竹僊

白く厚い夏の雲が眼前に広がっていて、空一面雲に覆われているという光景を思い描きます。雲が流れていくうちに、穴のように夏の青空が見えて少し気が晴れた、そんな情景を読みます。青空が覗く様子は、家の天井に穴が空いたような感じですが、一瞬の出来事で、塞いだ心情を上手く捉えています。(大佳)

水底まで水がたまって忍野盛夏

佐藤竹僊

私が忍野に行ったのは何十年前でしょうか。池は表面は広くないが、その深さと底まで透明な水が怖いほどだったという記憶が、この句で蘇りました。「水がたまって」でその深さを表しています。深いと水底は見えないものですが、くつきりと見えるのは怖いものです。(なほ子)

十匹の芋虫 飢えて葉の無き木

森なほ子

集中数句が揚羽蝶が産卵して生まれた芋虫が育たなかったという一連の物語になっています。暑さもあり、美しさを欠く産卵に作者が苛立っている様子もうかがえます。木に葉が付かず、芋虫が飢えていくのも、二〇二三年の異常な暑さが要因の一つではないかと思えます。(大佳)

人気無き住宅街を行く神輿
神輿一服住宅街の小料理屋

森なほ子

見物のぬない神輿は意気上がりず練ることも無く「行く」。行きつけの小料理屋さんで神輿を下す。ここで一息、この連作のやうすではお神輿になほ子さんは随行されたやうだ。

地元のおまつり、地元といふ言ひ方より東京の住宅街のお祭の様子が描かれてゐる。永く住まはれてゐる町の様子も時移り人も代はり世情も代はり産土神を祀る様子も何となく寂しくなる。そんな祭のやうすを活写してゐる。

戦後すぐ中野区の町はお神輿は焼かれてなかつた。それでも樽神輿と称し手造りして、酒気を帯びた男たちは荒々しく戦後の町を練り歩いた。(喜孝)

栗を食み新聞を読み子の帰る

赤座典子

お子さんは近くにおられ、時々訪ねて来るので、特に話もなく……。そこにある栗を食べ、新聞を読み、いつの間にか帰る。親子のさりげない幸せな時間。(なほ子)

遙かなる太白照らす小望月

赤座典子

この句のおもしろさは金星といはず太白といひ月といはず小望月と詠んだことにより「遙かな

る」の効果を加えてゐる。星に詳しい人は非科学的といふかもしれない。文藝上の真である。

朝の楽しみに東の空をに明星を探す、このごろは見つかからない。「遙かなる」は典子さんから見てのことか、小望月からのことか迷った。(喜孝)

秋 暑 し 風 邪 長 引 き て 昼 の 夢

秋 川 泉

「昼の夢」が、昼に見た夢か、夢の中が昼だったか。おそらく前者であると思いますが、前者であれば、活動したいのに夢の中にいるという背徳感を、後者なら、元氣であればこう動きたいという願望をそれぞれ読みます。夢をどう読むかで、読者の気分を試されているようでもあります。

(大佳)

八 月 の 挽 歌 か す か な 風 渡 る

秋 川 泉

人口に膾炙した「八月の六日九日十五日」といふ句がある。作者を決めがたいほど多くの俳人がこの句を詠まれた。この句は多くの人の思ひを巨視的に捉へた作品。その思ひの中を「かすかな風」を感じる作者。その風は来し方から行く末へと渡つていく。作者を含め癒すやうに。「かすかな風」がこの句の眼目。「かすかな風」か「かすかに風」か何度も行き来したが結論は出なかつた。

(喜孝)

腸くらふ秋刀魚高値の苦味かな

七郎衛門吉保

秋刀魚漁も、秋刀魚の生息地の変化や、移動に伴い生息地の餌のプランクトンが減ったことによつて、不漁になつてしていると報道されています。長く親しんできた秋刀魚の腸も価値が上がつてしまつて、苦味が複雑なものになつてしまつたようです。(大佳)

秋澄めり甲武の峽の一軒家

七郎衛門吉保

吉保さんの作品は謎解きが多く考へてから納得する句が多いと思ふ。この句は壮大な山なみの中にある山間の一軒家を詠まれた。素直でおほらかな詠み方に感じ入つた。(喜孝)

磯蟹の巣穴ここそこささと影

篠田純子

磯蟹の敏捷な動きを見事に書き留めている。「ここそこ」と海中を指差しながら興味津々で見ている。親子であろうか。捕まえやうとすると素早く穴に逃げ込む。逃げ足が速い。「ここそこささと磯辺の蟹の様子を言葉のもつ音で巧に詠まれた。動詞をひとつも使はぬのに動詞以上の働きをしてゐる。(喜孝)

鉦叩潜む観葉植物レンタル中

篠田純子

集中に数句鉦叩の句があつて、ビルの地下に置かれている観葉植物に鉦叩が棲んでいるようです。その風情のある観葉植物がレンタル品であるというだけで、風情そのものが全て借り物に見えてきて、俳諧味を覚えました。(大佳)

S

オフィスやレストランなどへ重さうに運び込まれる観葉植物を見かけたことがある。運び込まれるまでその植物は快適に見守られて暮らしてゐたことだらう。それは鉦叩が鉢で鳴いてゐることで類推できる。これからは観葉植物もそれに見合ふ働きをするのである。純子さんはちよつとした経験を一句に仕上げ佳句をものにされてゐる。常にアンテナを張られてゐるのであらう。(喜孝)

夏瘦せて鎖骨のパーツはずれさう

篠田純子

鎖骨が浮き出て指で摘まめさうなやうすをおもしろをかしく詠んだ。「パーツの鎖骨」の方が私には受け入れやすい。それにしても「外れさう」には笑へた。(喜孝)

夢に学ぶ古典文法秋涼し

篠田大佳

ようやく涼しい秋が来て、心地好い眠りから覚めると、なにやら古典文法を勉強している夢を見ていたようだ。みやびな雰囲気が残っている。お母様の影響でしょうか？ 私などテストの夢

をいまだに見ますけど。(なほ子)

秋雨に濡れ真つ新な横断旗

篠田大佳

横断歩道に設置されてゐる学童が使ふ黄色い旗。掲句は事物を並べて済ましてゐる。このやうな詠みぶりは大佳さんには数少ないと思ふ。この句で目を惹くのは「真つ新な」。この汚れない旗の色に秋雨を置いたことにより「秋雨」も「横断旗」も存在感を確たるものにした。(喜孝)

色なき風されど暑さの続く日々

須賀敏子

二〇二三年は、秋らしい感覚を身を感じるものが少なく、俳句を詠んでも秋の季語に広がりが取れにくかったです。色なき風を感じつつも、ほんのり暑い秋を感じる作者に共感します。(大佳)

重なりて重たげに行く赤蜻蛉

須賀敏子

身辺を観察し句に書き留めてゐる。二頭で仲良く飛んでいる赤蜻蛉を「重たげに飛ぶ」は私には新鮮な見方だ。「重」の字を一句の中で使ひ分けて技巧的におもしろかった。うろおぼえたが「臀」帖してたんまのかたち赤蜻蛉」といふ面白い句があった。(喜孝)

転送の美しき朝焼け秋さやか

都築繁子

多分、作者も今朝なのでしよう、着信したのは美しい朝焼けのショット。あ行と「さや」の音の重なりが心地好く「朝焼け」の美しさを表しています。（なほ子）

若人の自撮りの笑顔九月尽

都築繁子

以前は旅先などで自分を撮りたいときはセルフタイマーか行きずりの人に頭を下げるしかない。今は自撮り棒なるものまでありアングルも苦勞なく変化を付け、スマホで好きなやうに撮れる。その自撮りの笑顔を温かく詠まれた。

私をはじめて自撮りをしたのはマイナンバーカード申請の写真を仕方なく撮った時。顔が気に入らず、変へやうがないがせめても何度も撮った。いまはカードに肩身が狭さうに収まってゐる。過日『中浦和駅』のホテルを利用した。大きな鏡の中にある自分を見つけスマホを向けた。結構気に入ったので遺影に使ってもらうか。（喜孝）

梨頂戴す隣人に感謝と礼を

長崎桂子

何のためらいもなく、単刀直入。日記の一行と言つてもよい。きつと日々の暮らしぶりも、「竹を割つたよな」毎日なのは、と想像して羨ましい。（なほ子）

法師 蟬坂の流りに唱和して

長崎 桂子

掲句を読みすぐ奈良の町を歩いた日のことを思ひだした。溝の幅が二尺ほどあったらうか。溝と云つてよいか分からないが勢ひよく水が流れてゐた。どのやうな水かは知らないが澄んだ水であつた。

この句の水は坂に沿つての流水。音を立てての勢ひのある流れである。この光景に法師蟬が趣を加へる。水音と法師蟬の声と重ね合はせ極上の世界が出来上がった。(喜孝)

もう一度食べたいパン

篠田純子

小学生の時に食べた、近所の「カネダ屋」のカツサンド。カツと言つてもメンチカツが三分の一ほど細くカットされ、ドッグパンに、キャベツと共にソースに塗れて挟まつた物である。なぜか懐かしい。高校の学校帰りに食べた、デパート地下2階のホットドッグスタンドの、ホットドッグ。あらかじめ会計をして、プレーンドッグを受け取る。千切りキャベツとケチャップ、マスタードはフリーだ。これでもかと、キャベツを詰め込みたつぷりとケチャップをかける。こぼさずに食べるのには、技術が必要だつた。あの頃の食欲が、懐かしい。

パン



うえのおばちゃん

秋川 泉

季節は暑くも寒くもなかった。

この話は誰にもしていない。一生だまっているつもりであった。私が幼かったころの事。上る坂戸と下る坂の程に私の里の寺はあった。その坂の上に住んでいた。「うえのおばちゃん」に、「あんぱんを一つ買って来て」とおつかいをたのまれた。さほど遠くない山村商店に小銭を預かり、私はあんぱんを買いに行った。その帰り道。田舎の農村には、あちこちに肥溜めがあった。子供の私は躓き、あんぱんを紙袋から取り落とした。あんぱんは、コロコロと転がり、肥溜めの角にピタリと止った。「あーよかったです！肥溜めの中に落ちなくてー！」心から心からそつ

思った。私は急いで「あんぱん」を拾って紙の袋に収めた。

おばちゃんの家に着いた。直ぐにおばちゃんは、喜んで袋から、「あんぱん」を出して、おいしそうに全部食べた。幼な心に、申し訳ないと心で詫びた。

夏目坂の小さなパン屋

篠田大佳

パンと聞くと、子どもの頃通っていた、夏目坂の中腹にあったロアルという小さなパン屋さんが思い出されます。焼きたてのパンの香ばしいにおい。入口に並べられたお盆やつかみ。レジで穏やかなおかみさんが丁寧でビニールに詰めてくれたパン。これがパンの原風景です。当時はキャラクターのパンやワインナー・ドーナツを好んで食べていました。

秋收集

思ひ出を誘ひだしたる牡丹雪

亀田虎童子

夜といふ字に眼がひとつ秋の夜

佐藤 竹僊

天高し伊吹こんもり並びける

赤座 典子

虎豆をゆっくり戻す明日は雨

文鳥は留守居が嫌ひ冬隣

伐採の茸あまたの太き幹

秋川 泉

道造のハウスに寄れば秋の色

秋の蚊にまとはりつかれ長電話

脚立の夫指さす妻と林檎狩

七郎衛門吉保

紅玉に口を窄めて昭和かな

秋暑しなんと鰻の自販機ぞ

篠田純子

税務署は昭和様なり秋の昼

篠田大佳

右耳に希望を秋思は左耳



秋麗かな女の句碑のある公園
落羽松見上げて秋を楽しめり
秋日和鹿手袋といふ町に
開拓の碑を見上げれば柿たわわ
学童も園児も駆ける秋の晴れ
沼の面に浮かぶ昔日薄紅葉
この道を行き祖父の墓彼岸花
ひとつ摘む定家葛の帰り花
落羽松の根方プリーツ秋日さす
秋風やヒヤシンスハウス今日も留守
ヒヤシンスハウス寝台に秋日差し
公園の古りし遊具や木の実降る

須賀敏子

都築繁子

長崎桂子

森なほ子

喜孝抄



壺中から

佐藤喜孝

鬼灯や娘盛りを唇曲げて

明子

鬼灯にしても、海酸漿にしても私は全く鳴らす事なく過ぎてしまひました。きつと作者はほぼづきに悪戦苦闘された昔日があつたのでせう。経験がなければこのやうに句は詠めぬものです。この句で「娘盛り」と俗語をさらりと生かされてゐる。戻れぬ「娘盛り」をこの句では見事に再現、戻られてゐます。「唇曲げて」といふリアリティある表現で再現されました。

路地奥に幻でよし白い萩

時を猛スピードで巻き戻し、行き着いた所は路地の奥。路地は都会の中にある住人しか利用しないところ。詠み人の胸奥に

ある路地の奥である。白い萩は忘れがたい人の象徴。「幻でよし」に目を離せない。

地球病み長月半ば猶夏日

地球の病因は自然の摂理に逆らつた人間の仕業か。「ながつきなかなばなつび」と深刻な社会をテーマにした俳句はときは重くなるところを、中七下五を「な」といふ頭韻で攻めてくると、怒りは遊びの裏に静かな怒りとなしみに……。曲者の俳句です。

名月は日付代りてビルを出づ

名月らしくない名月です。十五夜の十二時頃は月は南の空高くに来てゐます。さすがの高層ビルも月には敵ひません。都会を続けるやうにして高足で空を渡つて行きます。

作者明子さんには以前『あを』にあをを会員作品を揮毫していただいた方です。

「Bard」といふAIでいたずらしてみました。分からなくとも分かったふりを
して偉さうに日ふ。落語の「ちはやふる」とそっくり。結構肩の解れが取れる。
「Bard」は試験運転中とありました。(整形してません)

雲の穴ぼつかり夏の空がある 佐藤竹僊

この俳句は、夏空の青さを、雲の穴を通して表現した句です。

句の冒頭に「雲の穴ぼつかり」と置くことで、雲の穴の大きさと、そこから見える空の広がり表現しています。そして、「夏の空」とすることで、夏空の青さを表現しています。

この句は、夏空の青さの美しさと、その広がりを、シンプルながらも印象的に表現した、優れた俳句だと思います。

この句を鑑賞する際には、以下の点に注目するとよいでしょう。

雲の穴の大きさと、そこから見える空の広がり夏空の青さ

雲の穴の大きさと、そこから見える空の広がり、「ぼつかり」という表現を用いることで表現されています。この表現は、雲の穴がぼつかりと空いている様子を、可愛らしく表現しています。また、そこから見える空の広がりを、より印象的に表現しています。

夏空の青さは、「夏の空」という季語を用いることで表現されています。この季語は、夏の空の青さを象徴する言葉です。この句では、この季語を用いることで、夏空の青さを、より明確に表現しています。

以上の点を踏まえて鑑賞すると、この句は、夏空の青さの美しさと、その広がりを、シンプルながらも印象的に表現した、優れた俳句であることがわかります。また、この句は、以下の点において、ユニークな表現が用いられていることも特徴です。雲の穴を「ぼつかり」と表現していること

これらのユニークな表現によって、この句は、読者の印象に残りやすい作品となっています。

人気無き住宅街に行く神輿 森なほ子

この句は、人気がない住宅街を、神輿が行く様子を表現しています。

句の冒頭に「人気無き」と置くことで、住宅街の寂しさや空虚感を強調しています。そして、「住宅街」とすることで、神輿が通り抜ける場所の様子を具体的に表現しています。さらに、「神輿」とすることで、神事や祭りなどの特別な場面であることを示しています。

この句は、人気がない住宅街の寂しさと、神輿の神聖さが対比的に表現されてい

ます。その対比によって、神輿の存在がより際立つようになっており、神輿の持つ力強さや厳かさを感じさせます。

この句を鑑賞する際には、以下の点に注目するとよいでしょう。

人気がない住宅街の寂しさ

神輿の神聖さ

遙かなる太白照らす小望月 赤座典子

こちらの俳句は、明治時代の俳人・高浜虚子によって詠まれたものです。この句は、冬の夜空に、遙か彼方にある月と太陽が同時に見える様子を表現しています。句の冒頭に「遙かなる」と置くことで、月と太陽の遠さや、その存在感を強調しています。そして、「太白」と「小望月」とすることで、月と太陽の大きさや明るさの違いを表現しています。さらに、「照らす」とすることで、月と太陽が夜空を照らし出す様子を表現しています。

この句は、月と太陽の存在の大きさや、冬の夜空の静寂さを表現した名句です。

この句を鑑賞する際には、以下の点に注目するとよいでしょう。

月と太陽の大きさや明るさの違い

月と太陽が夜空を照らし出す様子

月と太陽の大きさや明るさの違いは、「太白」と「小望月」という対比的な言葉を用いることで表現されています。また、「照らす」とすることで、月と太陽が夜空を照らし出す様子が表現されています。

この句は、月と太陽の存在の大きさや、冬の夜空の静寂さを表現した名句です。具体的な鑑賞のポイントとしては、以下のようなものが挙げられます。

月と太陽の大きさや明るさの違い

句の冒頭に「太白」と「小望月」と置くことで、月と太陽の大きさや明るさの違いを強調しています。太白は、太陽の別名です。小望月は、月の中でも小さな月を指します。この句では、太白と小望月という対比的な言葉を用いることで、月と太陽の大きさや明るさの違いを表現しています。

月と太陽が夜空を照らし出す様子

句の最後に「照らす」と置くことで、月と太陽が夜空を照らし出す様子が表現されています。この句では、月と太陽が夜空を照らし出す様子を、静かに、しかし力強く表現しています。

以上の点を踏まえて鑑賞すると、この句は、月と太陽の存在の大きさや、冬の夜空の静寂さを表現した、名句であることがわかります。

秋暑し風邪長引きて昼の夢 秋川 泉

こちらの俳句は、昭和時代の俳人・小林一茶によって詠まれたものです。この句は、秋の暑い日に、風邪をひいて寝込んでいる人の様子を表現しています。

句の冒頭に「秋暑し」と置くことで、秋の暑さを強調しています。そして、「風邪長引きて」とすることで、風邪のひどさや、その苦しさを表現しています。さらに、「昼の夢」とすることで、風邪で寝込んでいる人の、現実から逃避したいという思いを表現しています。

この句は、秋の暑さや風邪の苦しさを、そして現実から逃避したいという思いを、シンプルに表現した名句です。

この句を鑑賞する際には、以下の点に注目するとよいでしょう。

秋の暑さ

風邪のひどさや苦しさを

腸くらふ秋刀魚高値の苦味かな 七郎衛門吉保

この句は、昭和時代の俳人・種田山頭火によって詠まれたものです。この句は、秋刀魚の美味しさに舌鼓を打つ一方で、その高値に苦笑いしてしまう様子を表現しています。

句の冒頭に「腸くらふ」と置くことで、秋刀魚の美味しさを強調しています。そして、「秋刀魚」とすることで、秋刀魚という季節の食材であることを示しています。さらに、「高値の苦味かな」とすることで、秋刀魚の高値に苦笑いしてしまう様子を表現しています。

この句は、秋刀魚の美味しさと高値のギャップ、そしてそれを表現する作者のユーモアを、シンプルに表現した名句です。

この句を鑑賞する際には、以下の点に注目するとよいでしょう。

秋刀魚の美味しさ

秋刀魚の高値

作者のユーモア

秋刀魚の美味しさは、「腸くらふ」という表現を用いることで表現されています。秋刀魚は、脂ののっていて、とても美味しい魚です。この句では、秋刀魚の美味しさが、腸がくらくらするほどであることが表現されています。

秋刀魚の高値は、「高値の苦味かな」という表現を用いることで表現されています。

秋刀魚は、近年、高値で取引されることが多い魚です。この句では、秋刀魚の高値が、作者にとって苦笑いしてしまうほどのものであることが表現されています。

作者のユーモアは、句全体から感じることができます。秋刀魚の美味しさと高値のギャップは、ユーモラスなものです。この句では、作者がそのギャップをユーモラスに表現することで、読者の笑いを誘っています。

以上の点を踏まえて鑑賞すると、この句は、秋刀魚の美味しさと高値のギャップ、そしてそれを表現する作者のユーモアを、シンプルに表現した、名句であることがわかります。

鉦叩潜む観葉植物レンタル中 篠田純子

この俳句は、観葉植物のレンタル業者の広告用句として、2023年に俳句投稿サイト「俳句 de 遊々」の俳句コンテストで最優秀賞を受賞した作品です。

この句は、鉦叩（かねたたき）が観葉植物に潜んでいる様子を表現しています。鉦叩は、太鼓を叩く職人のことです。この句では、鉦叩が観葉植物に潜んでいることで、観葉植物が生き活きとした印象を与えています。

この句を鑑賞する際には、以下の点に注目するとよいでしょう。

鉦叩の潜んでいる様子

観葉植物の生き活きとした印象

観葉植物の生き活きとした印象は、「観葉植物レンタル中」という表現を用いることで表現されています。観葉植物は、室内のインテリアとして、また、空気清浄や癒しの効果も期待できる植物です。この句では、観葉植物が生き活きとした印象を与えることで、観葉植物の魅力をアピールしています。

以上の点を踏まえて鑑賞すると、この句は、鉦叩が観葉植物に潜んでいる様子を表現することで、観葉植物の生き活きとした印象を与え、観葉植物のレンタル業者の魅力をアピールした、優れた俳句であることがわかります。

また、この句は、以下の点において、ユニークな表現が用いられていることも特徴です。鉦叩という、日常生活ではあまり聞きなれない言葉を用いている

観葉植物に潜んでいるという、意外な表現を用いている

これらのユニークな表現によって、この句は、読者の目を引くインパクトを与えています。

夢に学ぶ古典文法秋涼し 篠田大佳

この俳句は、古典文法について夢の中で学び、秋の涼しさを感じている様子を表現しています。

句の冒頭に「夢に学ぶ」と置くことで、夢の中で古典文法について学んでいる様

子を強調しています。そして、「古典文法」とすることで、学んでいる内容を具体的に表現しています。さらに、「秋涼し」とすることで、秋の涼しさを感じている様子を表現しています。

この句は、夢の中で古典文法について学ぶという、非日常的な体験を通して、古典文法の奥深さや、秋の涼しさの心地よさを表現した、優れた俳句です。

この句を鑑賞する際には、以下の点に注目するとよいでしょう。

夢の中で古典文法について学んでいる様子

秋の涼しさを感じている様子

夢の中で古典文法について学んでいる様子は、「夢に学ぶ」という表現を用いることで表現されています。古典文法は、日常生活ではあまり使わない知識です。この句では、夢の中で古典文法について学んでいることで、その奥深さや、学ぶことの喜びが表現されています。

秋の涼しさを感じている様子は、「秋涼し」という表現を用いることで表現されています。秋は、暑さも寒さも厳しい季節ですが、涼しさを感じることもあります。この句では、秋の涼しさを感じることで、心地よさや、安らぎを感じていることが表現されています。以上の点を踏まえて鑑賞すると、この句は、夢の中で古典文法について学ぶという、非日常的な体験を通して、古典文法の奥深さや、秋の涼しさの心地よさを表現した、優れた俳句であることがわかります。

また、この句は、以下の点において、ユニークな表現が用いられていることも特徴です。夢の中で学ぶという、非日常的な体験を詠んだこと

秋の涼しさを「秋涼し」というシンプルな表現で詠んだこと

これらのユニークな表現によって、この句は、読者の印象に残りやすい作品となっています。

重なりて重たげに行く赤蜻蛉 須賀敏子

この俳句は、秋の夕暮れ時に、赤とんぼが2匹重なり合って飛んでいく様子を表現しています。

句の冒頭に「重なりて」と置くことで、2匹の赤とんぼが重なり合っていることを強調しています。そして、「重たげに行く」とすることで、2匹の赤とんぼの重さや、その動きの鈍さを感じさせています。さらに、「赤蜻蛉」とすることで、秋の季節感を表現しています。

この句は、秋の夕暮れ時の、静寂で物悲しい雰囲気表現した、優れた俳句です。この句を鑑賞する際には、以下の点に注目するとよいでしょう。

2匹の赤とんぼが重なり合っていること

2匹の赤とんぼの重さや、その動きの鈍さ

秋の季節感

2匹の赤とんぼが重なり合っていることは、「重なりて」という表現を用いることで表現されています。赤とんぼは、通常は1匹で飛んでいます。この句では、2匹の赤とんぼが重なり合っていることで、秋の夕暮れ時の、静寂で物悲しい雰囲気表現されています

転送の美しき朝焼け秋さやか 都築繁子

転送の朝焼けは、秋の季節に特に美しく、夕焼けと比べてより鮮やかで優しい色合いになります。

この俳句は、転送の朝焼けの美しさを、秋の季節感とともに表現しています。句の冒頭に「転送」と置くことで、転送の朝焼けであることを強調しています。そして、「美しき」とすることで、その美しさを感じさせています。さらに、「秋さやか」とすることで、秋の季節感を表現しています。

この句は、転送の朝焼けの美しさと、秋の季節感を、シンプルながらも印象的に表現した、優れた俳句です。

梨頂戴す隣人に感謝と礼を 長崎桂子

句の冒頭に「梨頂戴す」と置くことで、梨をいただいたことを強調しています。そして、「隣人に感謝と礼」とすることで、感謝と礼の気持ちを表現しています。この句は、シンプルながらも、感謝と礼の気持ちが伝わってくる、優れた俳句だと思います。

この句を鑑賞する際には、以下の点に注目するとよいでしょう。

梨をいただいたことへの感謝と礼の気持ち

梨をいただいたことへの感謝と礼の気持ちは、「頂戴す」と「感謝と礼」という表現を用いることで表現されています。この表現は、梨をいただいたことへの喜びと、感謝の気持ちを、シンプルながらも明確に表現しています。

以上の点を踏まえて鑑賞すると、この句は、隣人から梨をいただいたことへの感謝と礼の気持ちを、シンプルながらも印象的に表現した、優れた俳句であることがわかります。であることを示しています。

トイレ



おまる
篠田純子

源氏物語を、青表紙本（変体仮名）で読む勉強会に参加して、楽しく学んでいる。平安時代の高貴な女性は、寝ている状態か、脇息に凭れてたらしい。運動不足ゆえに、難産となり、命を落とす事もあったと言っ。トイレは、おまるを使用していたらしい。

和式トイレ

篠田大佳

物心ついた頃は、和式トイレから洋式トイレに切り替わるタイミングでした。自宅のトイレは洋式トイレでしたが、両親が経営していた飲食店は和式トイレで、和式トイレの使い方がわからなくて、段差に腰掛けて洋式のように使っていました。掃除が楽だったのかもしれませんが。きちんと使えるようになったのはもうちょっと先の話です。

ヘルパーとトイレ

秋川 泉

ヘルパーになる為、週一回毎土曜日、『ヘルパースクール』に半年間通った。そこに現役の若者ばかりが集っていた。私は初めての学びと若者達の中で、学生にもどった気分でも楽しかった。

その学びの中で、訪問先の利用者宅のトイレを借りてはならない」と云われた。

私は、仕事で訪問する家が決ると、その周辺で利用出来るトイレをさがしておく。スーパーや雑居ビル内のトイレは借りられる。生身の人間であるから突然緊急を要する場合のみ、訪問先で「申し訳ありませんが……」となる。しかし、基本は、作成されたプランを時間内にやり遂げる。それ以上の事、それ以外の仕事をするのは規定に違反する。ヘルパーも生身の人間であるが、ことトイレの問題は、重要な事と常に思っている。

あとがき

表紙

表紙は四十年前寄付のつもりで買った粟津潔のポスターです。B1版で大き過ぎ飾る機会がありませんでした。四十年経って世の中はなほ陰しくなっています。

一月一日には大地震が能登半島を襲ひました。一月二十一日久しぶりに東京に雨が降った。子規の句に「あたたかな雨が降るなり枯葎」があります。この「あたたかな雨」への読み方が分かれてゐます「春の雨」といふ説もあるほどです。雨に濡れ枯葎が色を変へ潤つてゆく。冬の雨なのに子規には雨に濡れた枯葎があたたかく見えたのであらうと鑑賞しました。好きで覚えてゐる一句です。

人工頭脳

「Bard」は google が開発中の A I です。開発中で現在無料です。「Bard」は不正確な情報（人物に関する情報な

ど）を表示することがあるため、生成された回答を再確認するようにしてください。」と断り書きがあります。それらしく書かれてますのがおもしろいですね。第170回芥川賞を受賞した九段理絵江氏が、受賞作の5%に「生成AI」を活用したとか。「Bard」に興味のある方は「https://bard.google.com/chat」 k.h.。

原稿募集今月はお休みいたします。

(喜孝)

二〇二四年一月号

発行日 一月二十五日
発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2 一階
電話 090 9828 4244 竹僊房
印刷・製本・レイアウト
カット／福井美佐子・テイリ エイマ

ゆうちょ銀行 (普) 会費 一〇〇〇〇円 (送料共) / 一年
(店番018) 4586402 表紙・佐藤喜孝
佐藤 喜孝 (サトウ ヨシタカ)

